

静岡・大崩海岸の山崩れ災害の地質学的調査

著者	土 隆一
雑誌名	静岡大学地学研究報告：地学しずはた
巻	3
号	1
ページ	none-none
発行年	1972-09-30
出版者	静岡大学理学部地学教室
URL	http://doi.org/10.14945/00005791

“静岡・大崩海岸の山崩れ災害”の地質学的調査

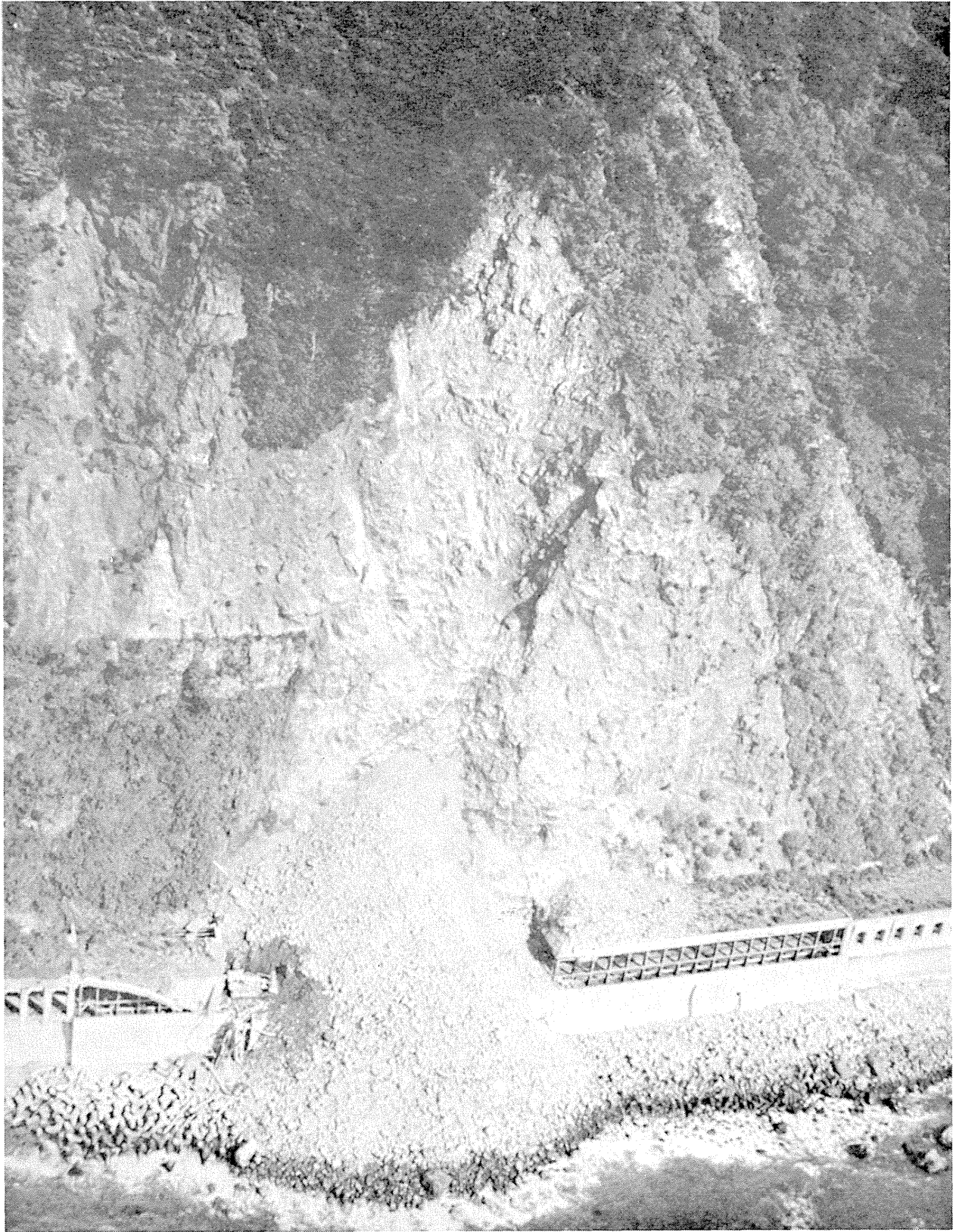
土 隆 一*

昭和46年7月5日、国道150号線が通る静岡大崩海岸で大規模な山崩れが発生し、鉄骨製洞門を押しつぶし、走行中の乗用車がその下敷きとなって死者を出すという惨事が起った。大崩海岸の国道は静岡・清水地区と榛南地区を結ぶ交通量の多い重要な道路であるが、従来もしばしば小中規模の山崩れが発生し、その都度交通が遮断されるばかりでなく常時落石の危険にさらされてきた。しかし、それら山崩れの原因については地質学的にはまだほとんど解明されていない。現在、道路つけ替え工事等も行なわれているが、いずれにせよ本地域を通らなければならず、また、現在の道路を今後どうして安全を保つようにするか緊急の問題である。

今回の山崩れ災害は“突発災害”として昭和46年度文部省科学研究費特定研究でとりあげられることとなり、約1年間、名古屋大学、東海大学の協力を得て、この山崩れ地帯を主として地質学的見地から調査をおこない、山崩れ災害について色々な面から検討をすすめてきた。その結果、従来未詳であったこの地域の地質が明らかにされ、山崩れ災害について多くの問題を指摘することができた。これらの研究結果はすでに研究連絡誌“静岡・大崩海岸の山崩れ災害に関する地質学的研究 研究報告論文集”(1972)に発表されているが、大崩れ海岸は本学のすぐ間近の地域でもあり、また、南部フォッサマグナの主要な地域の1つであって、この地域の地質はこの地方の地史解明にとって重要な基礎資料と考えられるので、ここに本学関係の論文を一部加筆して収録することにした。

なお、この特定研究に御協力頂き、かつ、研究打合せ会等で種々討論して頂いた名古屋大学の長沢敬之助、石岡孝吉、湯佐泰久、東海大学の杉山隆二、星野通平、青木斌、三沢良文、佐藤武の諸氏に厚く御礼申しあげる。

* 静岡大学理学部地学教室



大崩海岸崩壊地全景

崩壊面の標高最高点約 99 m、崩壊面の巾約 40 m、崩壊土砂量約 3,000 m³

この写真はヘリコプターより撮影したもの。